# スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの説いた、

# 異なる悟りの道の融合

2013年3月10日

マニラ講話

スワーミー・メダサーナンダによる講話

於・フィリピン・ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会本部

私がマニラを訪問するようになって約10年になります。時には年に2回来ることもあります。今回再びここに来てこうして皆さんとヴェーダーンタについてお話ができることをうれしく思います。また、1年のこの時期にマニラに来られてよかったです。日本は今寒いので、ここでこうして冬を逃れることができました。

この国のほとんどの方は、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが誰なのかご存じないでしょう。ごく簡単に言いますと、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは近代インドの預言者であり、今年私たちはその生誕150周年を祝います。インドでは、非常に大規模にこの祝賀行事が行われています。祝賀委員会の会長はインドの現首相で、祝賀行事の開会はインド現大統領が行いました。インド政府は、ヴィヴェーカーナンダが創設した組織であるラーマクリシュナ・ミッションと協力し、様々な慈善活動や宗教的プロジェクトでこの記念すべき特別な年を祝うべく大きな予算を投入しています。

この祝賀行事は世界各地でも開催されています。「スワーミージ」と呼ばれているヴィヴェーカーナンダは、1893年に米国シカゴで開かれた第1回万国宗教会議でスピーチを行い、一夜にして有名人となりました。この歴史的出来事を記念して、スピーチの行われた場所には記念碑が設置され、ミシガン・アヴェニューのその辺りはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ・ストリートと改称されました。また、シカゴ大学にもスワーミージの名を冠した職位が創設されました。日本でも数々のプログラムを実施する予定です。ここラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ・ソサエティ・オブ・フィリピン（Ramakrishna Vedanta Society of the Philippines）では、9月13日～15日に様々なプログラムの開催を企画しています。祝賀の集まりを開き、来賓を招いてスピーチをいただき、文化プログラムも行おうと考えています。さらに展示会や困っている人たちへの奉仕活動も実施する予定です。

こうした祝賀行事が単なる儀式的なものなのか、それとも何か特別な理由があるのかと思われるかもしれません。私たちにとって祝賀行事は、スワーミージの生涯や教え、貢献をじっくりと検証する機会なのです。インドや世界に対し彼はどのように貢献したのでしょうか。彼と現在とのつながりは何なのでしょうか。

インドへのスワーミージの貢献は非常に大きなものです。実際のところインドにおいて、政治、社会事業、教育、宗教などの国家レベルのリーダーでスワーミージの影響を受けなかったという人は一人もいません。マハトマ・ガンディ、ラビンドラナート・タゴール、賢者で哲学者のオーロビンド、元首相J・ネルーなどがその例です。

この国にとってより大切なこととして、全世界に対するスワーミージの貢献とつながりについてお話ししましょう。一つ目は、スワーミージが一人一人の中に神性があることを気付かせその神性を現す方法を示したことです。スワーミージにとって宗教とは教義ではなく、哲学でも儀式でも聖典でもありません。「宗教とは、すでに人の中にある神性を現すことである（Religion is the manifestation of divinity which is already in man）」これがスワーミージの考えた宗教の重要な概念です。この概念について深く考え瞑想してみください。あふれる光明があなたに差し込んでくるでしょう。宗派などとは全く関係のない定義です。どれ程の富や名声を手にしていようとも、自らの神性に目覚めそれを現そうとしないのであれば、人生は無意味です。恐れや苦しみ、不安に打ち勝つことはできませんし、持続的な真の喜びや平安を求める気持ちも湧かないでしょう。

スワーミージの二つ目の大きな貢献は、宗教間の調和です。宗教間の調和は私たちの生活に、家庭や地域社会、さらに国際間といった広義のレベルを含めた調和をもたらします。この調和の基準となるものは何でしょうか。調和は、人道主義の概念の一つでした。これは、私たちが皆人間だからです。カール・マルクスは貧困を基準にして世界中のプロレタリアの調和を図ろうとしましたが、この調和の概念は特定のグループの人々に限られていました。人道主義では、その調和の概念から動物や自然が抜けていました。マルクスは貧者のための調和を説きましたが、これには富裕階級や中産階級が含まれていませんでした。

スワーミージは、調和の真の基準は内なる結びつきであると唱えました。これはスワーミージの三つ目の大きな貢献です。私たちは、意識のレベルで皆互いにつながっているのです。人間も動物も自然もすべて結ばれているのです。ヴェーダーンタ哲学の観点では、意識はあらゆる所にあります。これは潜在的な場合もあり、ちょうど物質の中にある原子のようなものです。原子を壊すとものすごいエネルギーが放出されますね。この概念に基づいて言えば、調和は意識を通じて可能となるのです。哲学者や宗教のリーダーたちの中でこの調和について初めて語ったのは、『バガヴァッド・ギーター』の中のクリシュナです。彼が初めて、様々な調和の概念を明らかにしたのです。『ギーター』の一つの章でクリシュナが説く教えが、一つの悟りの道と見なされています。そして、これらがすべてヒンドゥー教の教えの一部であったということは真実です。当時は、キリスト教や仏教、ジャイナ教、イスラム教はどれも存在していませんでした。ですから、シュリー・クリシュナは古代インドで初めてこのような宗教間の調和の手本を示したのです。

次にブッダが現れ、その死後、仏教徒の間で宗教会議がいくつか開かれました。このような会議は、カトリック教会の主導でカトリック教徒間でも開かれました。これらの会議の目的は、ブッダやキリストの教えの解釈について異なる意見の調和を図ることと、信徒の間の調和を促進することでした。しかし、調和の確立を目指すこのような試みは、同じ一つの宗教内だけを範囲としており、仏教の中だけとかキリスト教の中だけを念頭に置いていました。そして1893年、アメリカ人が歴史上初めて万国宗教会議をシカゴで開催したのです。

この会議の目的は高貴で偉大でした。世界の全宗教の代表者らを集めて自身の宗教についてスピーチしてもらい、世界に存在する様々な宗教についてアメリカ人が学ぶというものでした。同時に、異なる宗教のリーダーらが互いに知り合い、多少なりとも意見を交換する機会を得られるというものでした。しかし、実は真の意味での宗教間の調和が目的ではなく、「隠れた目的」のようなものがあったのです。それは、キリスト教の優越性を確立しようとする試みでした。

スワーミージは、万国宗教会議の関係者からの正式な招待状なしに参加しました。興味深いことに、この「招かれざる」講演者は、壇上であがってしまい順番を遅らせてもらったにも関わらず、スピーチを行って会議の話題をさらいました。まさに「来た、見た、勝った（veni, vidi, vici）」のシーザー流でした。スワーミージはサラスワティ（学問の神様）を思い出して、感情を込め威厳と悟りの力を以て短く温かいスピーチを行いました。途端に、聴衆は電気が走ったかのように反応し、スワーミージに大きな拍手を送りました。スピーチの中でスワーミージは確信を持って言いました。

「この会議はこれまでに開催された会議の中で最も気高い会議である。この会議は、『ギーター』の説く『どのような形を通じてであろうと、私のもとに来る者に、私は触れる。各人は奮闘努力し各々の道を進み、それらの道はすべて最後には私のもとに通じる』という素晴らしい原理を世界に宣言し、その正しさを証明している。宗派間の争いや偏狭な思想、そしてそこから生まれる狂信はこの美しい地球を長い間支配してきた。世界には暴力がはびこり、幾度となく人々の血が流され、文明は破壊され国々や民は絶望した。このような恐ろしい悪魔がいなかったなら、人間社会は今頃はるかに進歩していたことだろう。しかし時が来たのだ。私は強く望む。今朝この会議を祝して鳴り響いたあの鐘が、すべての狂信に、剣やペンによるすべての迫害に、そして人々の中にありこれらと同じ道をたどらんとする無慈悲の心に、終焉を告げる弔鐘であることを」

この「調和の教え」は国際舞台で初めて説かれ、宣言されたのです。スワーミージのこのメッセージの背後にあったものは何なのでしょうか。今から4千年以上前のインドの聖典『ウパニシャッド』の中に、この調和の概念が次のように説かれていました。「真理は一つ、聖者はそれを様々な名で呼ぶ」神様は一人、至高の実在は一人、名前や形が違うだけであると。この概念はインドでさえも忘れられ実践されないことが多く、その結果が正統主義や偏狭さ、宗派主義、カースト的社会制度なのです。

近代の聖者シュリー・ラーマクリシュナがインドに現れ、この真理を実践し悟りを得ました。ラーマクリシュナは、ヒンドゥー教の様々な悟りの道をまず実践し、その後キリスト教やイスラム教を実践してイエスや預言者ムハンマドのビジョンを得たのです。そして様々な道で神を悟った後、ある重要な結論に達しました。「信仰の数だけ道がある」ということです。これは先ほどの「真理、あるいは神、至高の実在は一人、そこに至る道はいくつもある」という『ウパニシャッド』の概念と同じです。ラーマクリシュナはよくこう言われました。「神様を限定してはいけない」私たちはエゴや無知のせいで、しばしば神様を限定します。「神様はこれだけで、他にはあり得ない」と。私たちがこのように言う時、自分の宗教や預言者、聖典だけが真実で、他の宗教の神様や預言者、聖典は真実ではないと思っているのです。つまり神様を限定しているのです。

神様は無形で有形のはずがないとか、神様には形があり無形のはずがない、あるいは神様の形は一つだけで他の形はあり得ないなどと言うことは神様の限定です。神様は無限です。なのに、どうして無限なものを限定できるのでしょうか。神様は永遠で無限、全知全能で遍在であるということを受け入れるならば、どうして神様を限定できるでしょうか。これこそ神様への冒涜です。

ですから、シュリー・ラーマクリシュナはすべての信者に、自分の思う神様に従い、自分の道を進み、他者は批判しないようにと勧めたのです。ラーマクリシュナの説いたこの素晴らしい思想は、今日の宗教間の調和の基準となっています。ラーマクリシュナは知力で推測してこの結論に至ったのではありません。実際に悟りを得たのです。ラーマクリシュナは最初の弟子であるスワーミージにこの宗教間の調和を教え、訓練しました。スワーミージが後にこれを説いたのもこういう背景があるのです。

しかしこの概念には、実践を可能にするために解決しないといけない問題がいくつかあります。まず、神様は有形であるのに、または神様は様々な形を取るのに、同時にどうやって無形であることができるのでしょう。この問題についていろいろな宗教が反対の見解を示しています。ヒンドゥー教と神道は有形の神様、多数の神様や女神様を信じています。一方、セム語族の宗教であるユダヤ教、キリスト教、イスラム教などは有形の神を信じていません。この二つの対立する見解に折り合いをつけない限り、真の宗教間の調和は成し得ないでしょう。これについて、シュリー・ラーマクリシュナの語った話をお話ししましょう。

「森の中で木の上の動物を4人が見た。しかしその動物が何色だったか、それぞれが違う色を見たと言い張った。一人は赤かったと言い、一人は黄色、一人は青、一人は緑と言った。4人ははっきりさせようと、木の下に座っていた男の意見を聞いた。男は4人とも正しいと言った。男はその動物をよく知っていたのだ。それはカメレオンで、体の色を様々に変え、時には色がないこともあった」

物理学の世界では、水の例があります。化学式はH2Oで、温度によって様々な形を取ります。同じH2Oが、固体である氷になったり、液体である水になったり、目に見えない水蒸気として空気中に存在したりできるのです。物理学の領域では、同一の物質が異なる形を取ることや形がないことさえもあるのです。物質の場合であればこのことは簡単に理解できます。神様の場合でも、有形でありながら同時に無形であるということを認めるのは理に適っているでしょう。しかしこのことを完全に理解するには、本当に神様を悟る必要があるのです。悟りを得るという問題や必要性はここにあるのです。シュリー・ラーマクリシュナはこの悟りを得ました。純粋意識として形や性質のない神様、インドの聖典で言うところのブラフマンを悟ったのです。一方、同じ神様をカーリ母神やクリシュナのビジョンとして得てもいるのです。

さらに、人間と神様との関係、インド哲学で言うジヴァすなわち具現化した魂と超越の魂であるブラフマンとの関係の問題があります。これについても異なる見解があります。人間と神様、ジヴァとブラフマンは全く異なる二つの存在であると言う人がいます。また、人間と神様が完全に別々ではなく人間を神様の一部だと信じる人たちもいます。さらに、人間と神様を基本的に同一の存在であると見る人たちがいます。こうした異なる見解をどうやって調整すればいいのでしょうか。

インドの偉大な叙事詩『ラーマーヤナ』の登場人物の一人にハヌマーンというサルがいます。ハヌマーンは、神の化身であるラーマの信者でした。ラーマはハヌマーンに自分をどう見ているのかと尋ねました。ハヌマーンはこう答えました。「主よ、私は自分をただの肉体だと見る時、あなた様と私は別々の存在だと感じます。しかし、自分を肉体と魂の混合、具現化した魂であると見る時、あなた様が全体で私は一部であると感じます。そして自分を純粋意識だと見る時、あなた様と私には何ら違いがあると感じません」こう考えると、先ほどの三つの異なる見解に折り合いがつきます。

さらに、神を悟る道がなぜいくつもあるのかという疑問もあります。キリスト教徒やイスラム教徒は神への献身的な愛の道を主に重視しています。仏教徒は、ブッダが本来説いたように知識を重視しています。ヒンドゥー教は、献身的愛、知識、瞑想、奉仕など様々な道（バクティ・ヨーガ、ギャーナ・ヨーガ、ラージャ・ヨーガ、カルマ・ヨーガ）をすべて認めています。これらの異なる道の一致点はどこにあるのでしょうか。異なる道が存在する理由は何なのでしょうか。

人間は一人一人適性や能力が違います。だからそれぞれの適性や能力に合わせるために異なる道があるのです。シュリー・ラーマクリシュナのたとえ話に、母親は夫や子供らの好みや消化力に合わせて同じ魚を違う方法で料理するというものがあります。

宗教は同じ原理を提唱できます。人はそれぞれ気質や心のあり方が違います。理性的な側面が強い人もいれば、瞑想を好む人、識別を好む人、情緒的な人などもいます。様々な宗教の道は気質や適性の違いに合わせて選べるのです。異なる道があるのはこういうわけであり、このような見方をすれば社会のレベルで宗教間の調和を図ることも可能です。個人のレベルでは、同じ人が様々な道（ヨーガ）を実践することができます。

スワーミージは、自身の創設したラーマクリシュナ・オーダー・アンド・ミッションの紋章を、神を悟るための異なる道の調和を表すものとしてデザインしました。紋章の中には波立つ水、蓮、太陽、ヘビ、白鳥が見えます。波立つ水は行為、すなわちカルマ・ヨーガを、蓮は神への信愛であるバクティ・ヨーガを、太陽は叡智の道ギャーナ・ヨーガを、ヘビはクンダリーニ、すなわち瞑想の道ラージャ・ヨーガを、白鳥は悟りであるパラマートマンを示す象徴です。これらのヨーガ（道）の一つか二つ、あるいはすべてを実践することで人は神を悟ることができるのです。これが、スワーミージの考える調和の象徴です。

また別の問題として、神の化身は一人だけしか存在しないのか、それとも複数が存在し得るのかという点があります。キリスト教ではイエスは神の唯一の息子ですが、これは神の化身の概念によく似ています。ヒンドゥー教には神の化身がたくさんいます。『バガヴァッド・ギーター』の中で主はこう言われます。「私は様々な時代に、人間の姿を取って現れる」少なくとも、双方とも神様は人間になって生まれてくるということを認めていますから、この点においては異なる見解を調整することができるでしょう。

最後の論点は、異なる概念を持つ異なる宗教の実践にどう折り合いをつけるかです。この問題は宗教間の調和のためにとても大切です。これには三つの点が挙げられます。まず、すべての宗教は基本的な要素の中でも純粋性と神の愛を重視していること。これはすべての宗教に共通しています。次に、違う宗教を信仰する人は互いにこのような一致点に目を向けるべきであり、一致しない点にばかり気を取られているべきではないということ。最後に、議論ではなく実践にもっと重点を置くべきだということ。実践すればする程、他者の信仰を受け入れて認める姿勢になるものです。実践しないと議論が増えるばかりで、不和の可能性が増すのです。

ここまで宗教の様々な道（ヨーガ）の調和と異なる宗教の調和は可能であるということを見てきました。しかしそもそも、ヒンドゥー教やキリスト教のように知識の道や愛の道などの異なる道の調和を、実践する必要があるのでしょうか。まず、神様を悟る道であるヨーガの中には他のヨーガを排除するものはないということを覚えておきましょう。たとえば、無私の働きであるカルマ・ヨーガの道を主に進む信者は、他のヨーガも活用することができます。私たちは皆、愛したいという本能的な気持ちがあり、最も高い形の愛は神への愛です。私たちにはまた学びたいという自然の欲求があり、子供の時だけでなく生涯を通じてこの欲求を持ち合わせています。この欲求は、私たちが神様、至高の実在を知った時に最も満たされることができます。また、誰もが働きたいという気持ちを持つのは当然ですし、実際、働きを逃れることはできません。この欲求を最も高い形で満たすのは、無私の働きを為すことです。神様のために働き、他者の中に神様を見て他者に奉仕するのです。さらに、私たちには考えたいという気持ちが自然にあり、私たちは常に何かを考えています。この気持ちが最もうまく満たされるのは､神様、至高の実在について考えることです。

要約すると、愛したいという欲求を最高の形で満たしたいのなら、愛の道であるバクティ・ヨーガを実践するのです。知識を最高の形で満たしたいのなら、知識の道ギャーナ・ヨーガを、働きたいという気持ちは無私の働きの道であるカルマ・ヨーガを実践するのです。では、神様を悟るための様々なヨーガを実践するのに落とし穴があるとしたら、それをどうやって避ければよいのでしょうか。

愛の道であるバクティの道だけを進む場合、感情的になりすぎて狂信的になる可能性があります。ギャーナ・ヨーガでは常に識別し自己に集中するあまり、無情で無味乾燥した利己的な人間になる危険があります。無私の働きの道カルマ・ヨーガでは名声への欲望を持つ危険があります。瞑想の道ラージャ・ヨーガでは、肉体を浄めて純粋にする必要があることから肉体にばかり気を取られる可能性があります。一つのヨーガだけを実践し他のヨーガすべてを排除すると、こうした落とし穴にはまる可能性があります。ですから、こうした危険を賢明に避けるために、すべてのヨーガを実践するとよいでしょう。そうすれば霊的修行もより面白くなります。ではどのようにすればいいのでしょうか。

ラーマクリシュナ・オーダー（僧団）の毎日のスケジュールを見てみましょう。私たちは、朝起きて瞑想します。次に線香を焚きながら神様に食べ物を捧げます。日中は様々な仕事があり、同時に生活の一部として神様のことをいつも考え、永遠のものと一時的なものの識別を心がけます。こうして私たちはすべてのヨーガの調和を実践しています。

信者の方々も同じパターンで調和を実践できます。そして、ヨーガの調和、神を悟る様々な宗教の道の調和を実践するこの方法を、異なる宗教の調和を実践するのに応用することができます。私たちは今日、人と交わらずに生活することはできません。現代のテクノロジーにより、私たちは一体になり共に生きざるを得なくなっています。もし他者と正しい方法で交流する方法を知らなければ、互いの近さから関係に緊張が生じて友愛よりも苦痛を感じ、望まない出来事がたくさん起こる可能性があります。

スワーミージの調和のメッセージは、この意味において大変重要です。日本の安倍首相、アメリカのオバマ大統領など今日の著名人にも認められています。安倍首相もオバマ大統領も訪印した際のインド国会でのスピーチで、スワーミージの言葉を引用しました。

宗教間の調和は、異なる宗教を信仰する私たちが平和で調和に満ちた生活を送るのに、そして互いに学び合うのに必要で大切なことです。私たちは自身のアイデンティティを保ちながら同時に他者から学ぶべきです。宗教間の調和という同じ原理を、家庭や地域社会、さらに国際間のレベルまで広げるのです。そうすれば、完全な調和を確立することができます。そのためには、どのようにすればよいのでしょうか。

先ほど言ったように、まず私たちの中にある「意識」の存在を認め、同じ意識が他者の中にも存在することを認めるのです。私たちは意識を通じて互いに結びついています。この考えを重視し、理解し、認め、そして実践しましょう。

最後に、宗教間の調和に深い信仰を持ちその実現への決意を示したスワーミージの言葉を引用して、私の話を終わりにしたいと思います。これを、私たち全員が自分のものとしましょう。

「私は、過去に存在したすべての宗教を認め、それらすべてによって礼拝する。それらの宗教が有形無形のどのような神を礼拝したのであれ、私はそれらの一つ一つで神を礼拝する。私はイスラム教徒のモスクへ行こう。キリスト教徒の教会に入って十字架の前でひざまずこう。仏教寺院に入りブッダと仏法に帰依しよう。森に入って、すべての人のハートの中に霊性の光を見出そうとするヒンドゥー教徒と共に座って瞑想しよう。」

「私はこれをすべて行うだけでなく、今後やって来るすべてのものに私のハートを開き続けよう。神の本は終わったのか。それともまだ啓示は続いているのか。霊的啓示を行う世界の素晴らしい本よ。聖書、ヴェーダ、コーランなどあらゆる神聖な本は、単にページの数が多いのではない。これから明らかとなるページを無限に有しているのだ。私はすべての聖典のためにこれらのページを開いて、現在に立つ。しかし、無限の未来のために自らを開いておこう。過去のすべてを受け入れ、現在の生活を享受しながら、今後やって来るすべてのものに対してハートの窓を開け放しておくのだ。過去のすべての預言者に敬意を表す。今日のすべての預言者に敬意を表す。未来の預言者に敬意を表す」